

平成22年度学校経営計画に対する中間評価報告

石川県立七尾高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)				分析(成果と課題)及び後期の取組(改善策等)																							
<b>1 学習習慣の確立と教科指導力の強化</b>																														
(1) 自主的・計画的な学習態度の育成に努め、平日の家庭学習3時間以上の割合90%以上を目指すとともに、休日学習の充実を図る。	<p>① ホーム担任・教科担任による個人面談等を充実させ、自主的・計画的な学習の取組を指導する。</p> <p>② ホーム担任・教科担任が連携して課題等の回収の徹底を図り、「生活実態調査」を利用して望ましい高校生活を実現する。</p> <p>③ 週末を含めた学習計画の重要性をホーム担任・教科担任が指導する。</p>	<p>休日の学習について計画を立てて臨んでいるか</p> <p>A 計画を立て学習に臨んでいる B 半分程度は計画を立てて臨んでいる C 1/4程度は計画を立てて臨んでいる D 何を学習するか考えていない</p> <p>平日の家庭学習時間が、</p> <p>A 平均4時間以上である B 平均3時間以上である C 平均2時間以上である D 平均2時間未満である</p> <p>休日の家庭学習時間が、</p> <p>A 平均6時間以上である B 平均5時間以上である C 平均4時間以上である D 平均4時間未満である</p>	<p>A 15.3% B 46.3% C 18.5% D 19.9%</p> <p>A 10.3% B 42.1% C 35.5% D 12.0%</p> <p>A 28.1% B 15.6% C 25.7% D 30.6%</p>	<p>A+B=61.6% 昨年は「1週間を通じての計画性」の調査でA+B=55.7%であった。今年度、何も計画を立てずに週末をむかえている生徒が約2割と多い。</p> <p>目的意識をもって学習ができるよう、ホーム担任・教科担任が学習の目標と方法を生徒に伝え指導する。 教科からの課題に対して、そのねらいを生徒が理解し主体的に取り組むよう教科担当者が指導する。</p> <p>A+B=52.4% 昨年同期よりも8.8%上昇している。学習が2時間未満の生徒が12%おり、1年生・2年生で、まだ予習・復習の習慣が確立していない生徒が多い。</p> <p>学習時間調査等をもとに、ホーム担任や教科担任が生活指導・学習指導を継続する。</p> <p>A+B=43.7%であるが、A+Bは、1年38.3%、2年14.5%、3年78.3%で学年によるばらつきが大きい。</p> <p>学習を習慣づけるため、学習時間が不足している生徒に対し、ホーム担任・教科担任・部顧問が連携して指導を行う。</p>																										
(2) 計画的・恒常的な授業研究を実施し、教師一人ひとりの教科指導力を強化することで、生徒の学びの質を向上させる。	<p>研究授業・教科指導研究会等を実施し、各種研修に積極的に参加するとともに、「生徒による授業評価」を活用し、教師個人だけでなく、教科全体で改善に取り組む。</p>	<p>本校の授業は、思考力を高めるための準備や工夫が、</p> <p>A 十分されている B 2/3以上されている C 半数はされている D されているのはわずかである</p>	<p>A 32.1% B 47.7% C 18.4% D 1.6%</p>	<p>A+B=79.8%で昨年同期より1.6%上昇しているが、A評価は、1年43.7%、2年24.5%、3年27.9%にとどまっており、生徒は、より質の高い授業を望んでいる。</p> <p>教師がさらに授業改善の意識を高め、研究授業・公開授業を通じて互いに評価し合い、授業の改善に努める。</p>																										
(3) 生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を研究工夫することで全ての生徒に対応した有効な指導法を確立する。	<p>① 学年内、教科内の連携を密にし、生徒の力を伸ばす適切な習熟度編成を行なう。</p> <p>② 教員各自及び教科が更なる習熟度授業の展開の仕方に工夫を凝らすとともに、習熟度別授業による生徒の学力の伸びを検証する。</p>	<p>本校の習熟度別授業は、</p> <p>A 実力がつき満足している B おおむね実力がつき満足している C あまり満足していない D ほとんど満足していない</p> <p>各教科で模試成績の伸びた生徒が</p> <p>A 80人以上である B 60人以上である C 40人以上である D 40人未満である</p>	<p>A 15.2% B 62.2% C 17.7% D 2.8%</p>	<p>A+B=77.4%、昨年同期より1.8%減少した。</p> <p>生徒の満足度のA+Bは、1年70.0%、2年75.5%、3年79.8%となっており、個に応じた指導が生徒の中に定着してきている。教師も49%が習熟度別授業による生徒の力の伸張を実感している。しかし、生徒のA評価は1年17.5%、2年9.3%、3年生20.6%で高いとはいえない。</p> <p>後期は、生徒のA評価が高まるよう、さらに指導を工夫し充実させる。</p> <table border="1" data-bbox="1256 1177 1464 1321"> <tr> <td colspan="2"></td> <td colspan="2">2年生</td> <td colspan="2">3年生</td> </tr> <tr> <td>国</td> <td>A</td> <td>国</td> <td>A</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>数</td> <td>A</td> <td>数</td> <td>B</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>英</td> <td>A</td> <td>英</td> <td>A</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>3年生では、国語105人、数学61人、英語95人の生徒が全国偏差値を伸ばしている。 2年生では国語121人、数学101人、英語110人の生徒が全国偏差値を伸ばしている。</p> <p>後期も、学力の伸長をめざし、指導を継続する。</p>					2年生		3年生		国	A	国	A			数	A	数	B			英	A	英	A		
		2年生		3年生																										
国	A	国	A																											
数	A	数	B																											
英	A	英	A																											
学校関係者評価委員会の評価		学習時間を増やす取組に対する評価が高いが、学習時間の増加は学力向上に結びついているか検証が必要である。																												
評価結果を踏まえた今後の改善方策		学習時間と成績の相関を分析し、その分析に基づいた指導を今後も継続していく。																												

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び後期の取組(改善策等)
<b>2 自主性の高揚と規範意識の向上</b>				
(1) 学年会、生徒会などで組織的に取組み、自主性・自律性を備えた生徒を育成する。	① 登校指導、街頭指導、全校集会時の講話等を通して自主・自律の生活習慣の確立を図る。	本校の生活指導(服装・遅刻・無断欠席等に関する指導)は A 適切な指導を行っている B ある程度適切な指導を行っている C もう少し徹底して指導する必要がある D 全く適切な指導とはいえない	A 50.9% B 38.5% C 2.9% D 0.6%	A+B=89.4% 全職員による朝の登校指導などの成果が現れている。 後期も継続して「規範意識向上プロジェクト」により規範意識を高め、自主・自律の精神の確立を図る。また、個別にも指導を行ない、改善を図る。
	② 生徒会の活動や部活動の状況を保護者に広報する。	学校公開や広報などの取組によって学校の取組が A 十分知らされている B ある程度知らされている C あまり知らされていない D ほとんど知らされていない	A 28.9% B 62.9% C 4.6% D 0.4%	学校行事についての情報提供への満足度は、A+B=91.8% 昨年同期より6.1%増加しているが、A評価は目標の50%に達していない。 後期は、保護者が学校に関心を持ち、来校の機会が増えるよう、企画と広報に努める。行事の案内を、迅速におこなう。
	③ 部活動を通じて生徒の自主性・自律性を育む。	部活動を通して、進んで物事に取り組む姿勢が A 身についてきた B 十分とはいえないが、身についてきている C あまり身につけていない D 全く身につけていない	A 34.3% B 41.8% C 7.5% D 16.1%	昨年同期のAは29.0%であり、5.3%上昇している。 短時間で質の高い練習を意識して、自発的に部活動に取り組んでいる。 後期、新入大会に向けて、さらに部活動を活性化する。 顧問は、部員の日々の変化に気を配り、個人面談を行なうなどして生徒一人一人への支援を行なう。
(2) 生徒と深く関わり人間としての「在り方生き方」を考えさせることで規範意識や帰属意識・共生意識を育成する。	① 学校行事の準備や後片付けにボランティアの意識を持って取り組ませるとともに、自ら進んで校内及び地域の美化に努める。	校内や地域のボランティアに A 自ら進んで取り組んでいる B ある程度取り組んでいる C あまり取り組んでいない D 全く取り組んでいない	A 5.1% B 29.7% C 41.2% D 24.0%	前年度は「自主性が培われたか」という質問に対し、A7.5%、B27.6%である。 本年度は、部活単位でボランティア清掃や奉仕活動に取り組んでいる。 この活動を継続し、生徒の自主性を育てる。
	② 生徒理解に関わる研修会に積極的に参加し、教員の資質向上に取り組む。	教育相談に関わる研修会 A 3回以上行った B 2回行った C 1回行った D 1回も行わなかった	B	6月と8月に研修会を2回実施している。 研修会の内容を実際に活用できるよう、研修内容を振り返る機会を設ける。
学校関係者評価委員会の評価		ボランティアについて、各種団体の企画するものを活用するのも1つの方法である。 ボランティアを広報し、生徒の自覚を高めることが大切である。		
評価結果を踏まえた今後の改善方策		生徒の学校生活に応じ、部活動単位でできるボランティアを推進していく。 地域での清掃ボランティア等を広報していく。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び後期の取組(改善策等)
<b>3 キャリア教育の推進と自己実現能力の育成</b>				
(1) 学校教育全体にキャリア教育を展開し、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力などの生きる力を育成する。	教育活動全体を通じて、キャリア教育を推進し、挨拶する生徒を育成する。まず授業で、生徒がしっかり挨拶をできるようにする。	本校の先生は授業の開始・終了の挨拶指導を A 徹底してる B だいたいしている C 時々している D あまりしていない	A 61.2% B 28.6% C 2.0% D 0.0%	A+B=89.8% 目標の80%を超えている。 同じ質問に対する生徒の評価はA+B=77.0%であり、十分とはいえない。後期はさらに指導を徹底していく必要がある。
(2) 高い進路目標を持たせ、進路実現を目指す態度を早期に育成する。	個人添削等の指導を継続、強化して受験に必要な学力をつけることで、生徒が希望する第一志望校に出願する。	出願した第一志望校に A 満足している B だいたい満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	/	2月に進路指導課で調査予定
(3) 3年間を見通した指導体制の構築・教員全員による組織的指導体制の強化を図り、生徒の習熟度に合わせた教材の開発・利用方法の研究を進める。	難関大学の問題解法研修会を各教科で実施し、教科指導力を高めるとともに、個別指導体制を整備して添削指導に当たる。	質問に的確に対応してくれる先生が、 A ほとんどである B 2/3以上いる C 半分はいる D 半分はいない	A 74.2% B 20.2% C 3.8% D 0.6%	A+B=94.4% A評価74.2%。質問への対応や個別指導に対する生徒の評価は高い。 研修会等を通じて、さらに教科指導力を向上させるとともに、質問に来ない生徒にも教科の担当者から質問を促すなどの働きかけを行なう。
学校関係者評価委員会の評価		インターンシップなど取組が多いが、生徒の負担にならないよう配慮が必要である。 グローバル化の社会では競争心をつけることが重要である。		
評価結果を踏まえた今後の改善方策		生徒の希望と意欲を重視し、充実感のある取組にしていく。 勉学でも部活動でも、切磋琢磨する人間関係づくりを目指して指導を行なう。		

4 特色ある教育活動とSSH事業による人材育成				
(1) 事象を科学的に探求する論理的な思考力と創造性・独創性や英語活用能力を育成し、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成を目指す。	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどに、積極的に参加し上位入賞を果たす力を身に付ける。	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジ、数学オリンピックなどで、入賞者が A 15名以上である B 10名以上である C 5名以上である D 5名未満である	D	化学グランプリ、物理チャレンジ、生物チャレンジの入賞者が出ていない。数学オリンピックについては、入賞にむけて指導を継続する。
(2) 小中学生や地域にSSH事業を広報し、その成果を普及することによって本校理数科への理解を図る。	① SSH活動および成果を近隣の中学校・保護者等へ広報する。	近隣の中学校への広報活動の成果が、理数科体験入学者数の増加となり、昨年より A 20%増えた B 10%増えた C 5%増えた D 5%も増えなかった	A 34.7% B 61.2% C 4.1% D 0.0%	10月の理数科体験入学時に調査予定。
	② 授業、教科研究会、学校行事および普通科向けのSSH事業を展開し、これまでの成果を全校的なものにする。	SSH事業の研究開発の成果が、全校に A 十分に還元されている B ある程度還元されている C 少ししか還元されていない D 還元されていない		Aは、昨年同期より、6.1%増加している。SSH通信は、これまで6回定期的に発行されており、全校に理数科の活動が知られるようになってきた。今後も、広報の取組を継続する。
学校関係者評価委員会の評価		SSHの効果を見るには、卒業後の追跡調査が必要である。		
評価結果を踏まえた今後の改善方策		追跡調査で効果を検証し、指導に活かす。		

(注) 評価が「やや低い」「低い」ものについては、早急に改善策を検討する。